大学院へ行こう

包括歯科補綴学分野大学院２年　安　野　綾　夏

私が大学院進学を決断した理由は、もともとは１つしかありませんでした。臨床研修期間があと数か月で終了しようとしていた頃、まだまだ自分は勉強不足かつ経験不足であり、社会に出て実際に患者さんの診療をしてもいいのだろうかと不安に思っていました。臨床研修期間の後半半年は大学の義歯診療科で研修を行っていましたので、身近に専門医が何人もいて、気軽に相談ができる環境に魅力を感じ、ここでなら臨床の勉強をしっかりできるのではないかと思ったことが理由でした。

大学院生活が２年目に突入した今、もしも周りに大学院へ進学しようとしている後輩がいたら、ぜひお勧めしたいと思います。なぜなら、どの科の院へ進んだとしても、必ず、人生で今しかできない経験を積むことができると思うからです。大学院生は臨床ももちろんのこと、研究を行うことができることも魅力の１つであると思います。研究の内容は多岐にわたると思いますが、研究自体の知識や技術を得ることはもちろん、研究を進めていくうえで必要な論理的な思考やゴールを見据えて計画を立てる力は、研究者としてだけでなく、すべての職業にとって必要なことではないでしょうか。大学院ではそのような力が自然と身に付けられると思います。他にも、他の専門診療科の先生とディスカッションできることや、研究を通じて国内外の学会に参加することができること、他病院や開業医へ出張して、いろいろな環境での診療を経験することができることなど、私が大学院進学により得たメリットは数えきれないほどに増えたと思います。

これからも臨床と研究のバランスをよく、日々邁進していきたいと思います。自分の経験が、進路に悩む後輩たちの参考になれば幸いです。

ありがとうございました。

大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野大学院３年　安　藤　大　樹

歯周診断・再建学分野の安藤と申します。今回、歯学部ニュースの原稿執筆という貴重な機会をいただいたので、自分の今までを振り返りながら大学院という場所をご紹介できればと思います。

そもそも私は卒業時点で進路を決めきれておらず、大学院と開業医の両方を経験できる臨床研修のＢコースを経てからその先を判断しようと考えていました。そこで現在の所属分野にお世話になり、根拠に基づいた医療を行うためのトレーニングに、論文を読み、考える事ができる大学院の環境が最適であると感じたこと、そもそも職場として、雰囲気の良い医局が魅力的だったことから大学院進学と分野への所属を決めました。それから院生として過ごし実感したのは、大学院には、臨床をじっくり取り組む事ができる、研究に携わる事ができるという魅力があるのはもちろんのこと、１番の魅力は多様な個性を持つ人々と気軽に交流する機会があることなのではないかということです。別の分野の同期をはじめとして、他大学、海外、はたまた歯科以外のジャンルの先生等様々な人と働き、切磋琢磨し、時には飲みに行ったりする機会があります。そこには、歯科医師としてだけでなく、人間として大きく成長するためのヒントに溢れていました。まだ院生として道半ばですが、この４年間は自分の今後の人生にとって大きな意味を持つと確信しています。よければ皆さんも大学院進学を検討してみてください。

長崎の学会にて（筆者は右側）

大学院へ行こう

摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院４年　板　　離　子

私の大学院進学のきっかけは、当科の臨床実習を通して感じた、自分が進むべきはこれだ！という直感でした。「食べる」という当たり前に思っていたことが上手くできず、その方のQOLだけではなく生死にまでも関わる可能性のある嚥下障害に対して、歯科として携われることにとても興味を惹かれました。当初は「専門的に臨床を学びたい」が先行していましたが、この３年で研究の魅力も少しずつ分かってきたように思います。当分野は特に歯科的な関連（舌機能や咀嚼など）については、まだまだエビデンスに欠けている部分があり、例えば嚥下訓練として舌訓練がよく行われますが、その際の舌筋活動についてはまだ解明されていない部分も多く、私の研究テーマはざっくり言うとこれでした。自身の研究が進みその事象のことが分かってくると、実際の臨床場面でも理論的に考えたり新たな疑問が生まれたり、気付けば４年生になった今では舌機能の更なる解明を目指して実験に励む日々です。先生方のとても手厚いご指導があってのことであり、まだまだ研究者としては未熟・微力ではありますが、この分野の更なる発展、嚥下障害患者さんへの貢献が少しでもできればと考えています。

最後に、「これを突き詰めたい」という意志があれば、ぜひ大学院進学を考えてみて下さい。大変なことも多いですが、その後の歯科医師としての自身の糧となり患者さんへの貢献へと繋がるはずです。

国際シンポジウムにて、指導医の先生方・同期と（筆者は左から４番目）